

4 技能の時代における精読の必要性—

『Clues to Reading 英文解釈の徹底演習 Standard』発行に際して

竹岡 広信

1. 謝辞

この度、おかげをもちまして『Clues to Reading 英文解釈の徹底演習 Standard』を発刊する運びになりました。現場の先生から「現在発行されている『Clues to Reading 英文和訳の徹底演習』はちょっと難しいので、もう少し平易な英文で書かれた標準編がほしい！」という声に応えたものです。こうした常日頃からのご支援に支えられて、ここまでくることができました。この場をお借りして、改めて感謝の気持ちをお伝えいたします。

2. 最低限の読解ルールは、いつの時代でも必要

時代は「4技能」です。このような時代に、昭和の受験英語のような細かい「構造分析」は必要なのでしょうか？「答えはノー」です。私自身、構造を事細かに教えることにかかる時間は随分と減りました。英語力を伸ばすのは、何と言っても「多読・多聴」です。あとは語彙力をつけることだと思います。そんなことは当然であって、今更ここで言うことではないのかもしれませんが、ただし、最低限のルールは身につけていなければなりません。昭和の頃なら、「最低限のルール」は中学校でゴリゴリと演習をしていたような気がしますが、現在では事情が異なります。そしてそれは年々悪化の一途をたどっているような気がしてなりません。

3. 危機的な状況

英語の8つの品詞の名前を書け。
ただし、冠詞と間投詞は除く。

これは、高校1年生になったばかりの生徒に行なった試験です。8つとも正解した生徒は皆無。それどころか「形容動詞」「不定詞」「関係詞」などという「あり得ない答え」がかなり出てきました。「品詞がわからない」というのは、外国語学習において

は支障をきたします。母国語の場合には大量のインプットとアウトプットを繰り返していますから、わざわざ「形容詞」とか「助詞」などに分類しなくても、まったく問題ありません。ところが、外国語習得の場合、浴びるように外国語に触れる環境にない場合には、品詞の識別は必須です。たとえば、品詞がわからないと、「前置詞のつくものは主語にはならない」、「強調構文は名詞か副詞を強調する」、「他動詞+副詞の熟語の場合には、代名詞は副詞の前に置く」などの説明は理解不能となります。さらに、「文を読む際には、名詞、動詞、形容詞、副詞は強く読む」といった音読に関わる指示さえ意味をなさなくなります。

先ほどの高校1年生には、「名詞・代名詞/動詞・助動詞/形容詞・副詞/接続詞・前置詞」と2つずつをペアにして何度もみなで合唱し、すべてを暗記させました。この作業は2分もかかりません。中学でやる時間がないとは思えません。

次の授業の時に、次のような試験をしました。

should, choice, however, always の品詞を書け。

however を接続詞、choice を動詞と答えた生徒は90%以上。予想をはるかに上回る結果です。近頃、SV, however, SV. や I want to choice ~. などの文を平気で書く生徒が急増していることもうなずけます。ところがもっとショックだったのは、should を副詞と答えたり、always を助動詞と答えたりする者もかなりいたことです。英作文で He may comes here. や He always be late. と書く生徒が多いことの原因は品詞識別ができていないことに、その原因があったわけです。

つまり、中学での品詞学習が不十分なため、「なんとなく覚えたもの」で自分勝手な理論を作っているということなのです。このような「恐ろしいミス」のレベルには、下限はないようです。

4. 枠組を教えることの重要性

1. 命令文とは何か。
2. 3人称単数現在とは何か。

上記のような問いを、高校1年生に出してみました。回収した答案を見てがく然としました。80%以上の生徒が、命令文や3人称単数の概念がわかっていないのです。「命令文」は「動詞を強調する文」、「be から始まる文」など、「3人称」は「3人目の人間」などの珍回答が数多く出ました。これは、命令文や3人称単数現在の定義をきちんと教わっていないことに原因があると考えられます。

ものごとを教える時には、まず「大きな枠組」を作り、その後、徐々に詳しいことを教えていくのが定石です。ワインなら「赤、白、ロゼ、泡」と大きく4つぐらいに分類し、それがこなれてきてから「ブルゴーニュ地方」などの細かい話になるのと同じです。ただし、大きな枠組がなければ、いつまでたっても「なんとなく」という気持ちから逃げられません。

「非人称独立分詞構文」などのような、重箱の隅をつつくような文法用語はいりません。しかし、概念を理解するのに手助けとなる用語は、生徒の理解の手がかりになることは間違いありません。我々教員はそれを必死に教えなければなりません。こうしたことの重要性は、料理教室でもし「千切り」や「3枚におろす」という用語を使わないで授業をすれば、どれほど煩雑になるか、と考えればすぐにわかるはずです。

5. 他動詞と自動詞の識別の重要性

次の文を訳しなさい。

Zoos provide us with the opportunities to observe in the flesh animals that you could not hope to view in the wild.

他動詞と自動詞の識別は、読解や作文では極めて重要です。see は「見る」ではなく「～が見えている」、observe は「観察する」ではなく「～を観察する」と覚えておかないといけません。もちろん、他動詞でも自動詞として使える語も存在します。しかし、主に他動詞として使うものは「～を」をつけて覚えさせることが重要です。上記の文「動物園は、

野生ではまず見ることを望めない動物を生で観察する機会を与えてくれる」の意味になりますが、observe を「～を観察する」と覚えていれば、「何を観察するのかな」という問いが立ちます。そのあとに in the flesh という副詞句が置かれているので、そのあとの animals (that ... wild) が observe の目的語だとわかるはずですが、この問題を高校1～2年生にやらせてみると「新鮮な動物を観察する」としてしまふ生徒が圧倒的な数になります。flesh を fresh と取り違えてしまったのも問題ですが、その訳では in の意味が出ていません。とにかく、英文解釈では、他動詞を他動詞として覚えておかないと「目的語を探す癖がつかない」ということになってしまうのです。

次の文の誤りを指摘しなさい。

1. I spent in Kyoto last month.
2. I enjoyed in Australia.

これは英作文でも言えます。spend を「過ごす」enjoy を「楽しむ」と覚えていると、上記のようなミスをしてしまうこととなります。それぞれ正しく書くと、次のようになります。

1. I spent *last month* in Kyoto.
2. I enjoyed *myself* in Australia.

6. 構造分析の必要性

次の文を訳しなさい。

Can can can cans.

これも今年、高校1年生にやらせた問題ですが、英語の文の基本構造を知っていればある程度解決できる問題です。まず、文頭の Can が何であるかがポイントです。この文には？マークがついていませんから、疑問文ではありません。普通、命令文や一部の特殊な文でなければ、英語の文には主語が必要です。よって、最初の Can は「キャン(という名前の人)」だと判断できます。さらに、Can という名前の人物は、Ben などと同様に「3人称単数」です。よって、次の can が動詞ならば cans となるはずですが、ところがこの文の can には s がついていません。以上から、2番目の can は助動詞だとわかります。ここまでわかればあとは簡単で、3番目の can は動詞であり、4番目の cans は名詞で目的

語であることがわかります。結局「キャンさんは缶を缶詰にすることができる」の意味だとわかります。私の教えている高校1年生でこれが訳せた生徒は皆無。驚いたことに「できる、できる、できる、できる」と訳した生徒が多数いました。涙が出ます。

現在、中学校、高校の現場では“can do”を掲げてさまざまな試みがなされていますが、私の目には“can't do”が増えているような気がしてなりません。

7. 『Clues to Reading 英文解釈の徹底演習 Standard』の特徴

① 読解に必須と思われる重要ポイントを厳選

読解の重要ポイントを15レッスンにまとめています。各レッスンに2つのポイントがあるので、全部で30のポイントを学習することになります。たとえば、We believe that in Canada people are ～. の文で、「カナダでは人々は～」と訳すところを「カナダの人々は～」と訳してしまう生徒が、予備校の上位クラスでも半数ぐらいもいます。さらには「私たちはカナダのそれを信じています。人々は～」と訳す生徒も少なからずいます。これは「接続詞 that の直後に副詞句[節]が挿入されることがある」という原則を知らないためです。本書では、そうした「頻出の原則」を中心に学習できるようになっています。

② さまざまな学習ポイントを凝縮した短めの文章を使用

それぞれの演習問題となる英文は、ほとんどが100語以内の短いものです。その中に該当レッスンでターゲットとなるポイントだけではなく、既習のポイントも入っており、さらにそれ以外でも重要な事項が入っているものを選びました。素材を選定するにあたり過去3年分の大学入試問題(旧帝国大学などの難関大学を除くもの)を、精査しました。また例題の英文もできるだけ入試問題から抜粋する形をとりました。

③ 設問は和訳と説明問題が中心

ターゲットの構造を含むところは本当に理解できているかを確認するために和訳の形式とし、それ以外の箇所は、和訳あるいは説明問題を中心とした形式にしました。昨今、説明問題を出題する大学が増えていることを考慮し、できるだけ多く扱うように

しています。指示語を答える問題、下線部分の具体的な説明や理由などを答える問題だけではなく、文章全体の内容がわかっているかを確認する設問も用意しました。

④ 実際の生徒の答案を採点し、解説を作成

ベテランの教員なら、生徒が間違う箇所はある程度予測ができます。しかし、中学での英語学習の状況が毎年変化しており、生徒自身も変化するなかでは「昔の常識」が「今の非常識」になることもあります。ですから、生徒の答案を採点してみると「ここで間違うだろうな」と思うところでは間違っていないのに、「こんなところでミスをするんだ!」というところで間違いをしていることがよくあります。そうしたことを踏まえ、この問題集で用いた問題はすべて高校生に解いてもらい、誤答例を分析して解説を作りました。中にはとんでもない誤答例が示してある場合がありますが、それも多くの生徒が共通して間違えたところなのです。

次の語句を訳しなさい。

the great separation of the islands from
the nearest continent [名詞構文を見ぬく]

上の英文は、実践問題からの抜粋です。生徒にやらせてみると、名詞構文がつかめていないことももちろん多いのですが、greatの訳のミスが多いことに気がつきます。この英文ではseparationの程度が大きいことを示しているにすぎないのですが、「偉大な」の類いのプラスイメージの訳語が数多く出てきます。これは、おそらくgreatを「偉大な」という訳語で暗記しているためだと思われます。このようなミスは採点してみて初めて、教師の側が気づくものだと思います。

8. 結び

今、日本の英語教育は大きな変革の時を迎えようとしています。しかし、だからこそ虚ろなる声を響かせ、「4技能、4技能」というお題目を唱えるだけでなく、「なくてはならない基本」の部分を従来以上に大切に作る姿勢も大切だと思われます。

(駿台予備学校講師、学研プライムゼミ特任講師、
洛南高等学校講師、竹岡塾主宰)